

自分の思いを新聞に ～発見や驚きを他の人に伝えるための新聞作り～

指定校 1 年次

佐久市立佐久平浅間小学校 藤岡泰裕

I 本校の新聞活用（NIE）の現状

1 本校の概要

本校は4年前に約550名で「佐久平浅間小学校」として出発した新設校である。この4年間で児童数は増え、現在は27学級、約700名となった。

2 児童会の中に新聞委員会がある

新聞委員会では、そのときどきの学校での出来事や様子取材し、新聞の形にして、教室や児童がよく通る廊下等に掲示している。

3 「小学生新聞」はよく読まれている

本校は「朝日小学生新聞」が図書館に常時置かれていて、この新聞を開いて読んでいる姿がよく見られる。本校児童の情報に対する関心の高さがうかがえる。

4 各学年で新聞形式のまとめをしている

（例）3年：地域見学を通して調べたことに自分の感想を加えてまとめる。

4年：社会見学をして調べてきたことやわかったこと感想など、メモをもとにまとめる。

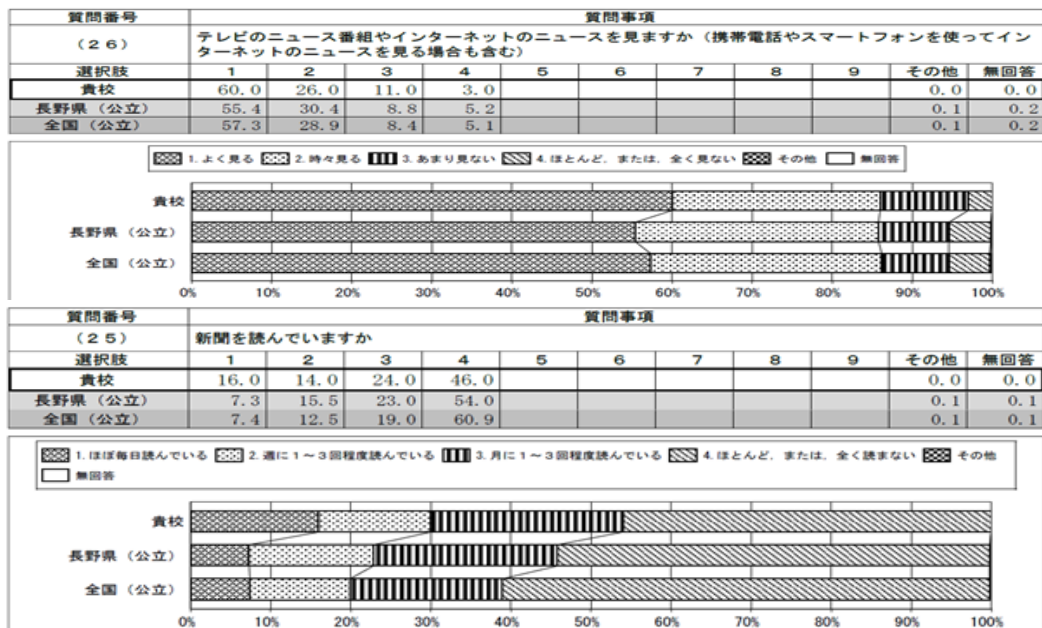
5年：理科「生命の誕生(人)」の単元で、教科書・DVD・模型・家の人や医者、養護教諭などに取材したことの中から、「人は母親の胎内でどのように育ち生まれてくるだろうか」についてまとめる。

6年：修学旅行で見学したことの中から自分の発見や驚きなど取材したときのメモをもとにして、自分の思いを他の人に伝えるようにまとめる。

それぞれの学年でその段階に応じ相手に伝えることをねらいとして、また、自分が学んだことを確実にすることをねらいとして、新聞の形をとってまとめをしている。

5 本校6年生の全国学力・学習状況調査から新聞を読んでいる児童が多いことがわかる

今年4月、全国学力調査が行われた。その中に質問紙があり、新聞やインターネットのニュースについての項目では以下のような結果であった。



これを見ると、本校はテレビやインターネットのニュースを見ている児童は全国平均とそれほど差がないのに対し、新聞を読んでいるかという質問に対しては「ほぼ毎日読んでいる」と回答した児童が全国比で約2倍となっていて、新聞が本校児童にとって比較的身近な情報源となっていることがわかる。

II 実践のねらい

今回、NIE 研究校の指定を受けて「新聞を作る授業なのか」「新聞を使う授業なのか」その点について考えていく中で、7月18日の事前授業では「新聞を使う授業」を行うことにした。授業は社会科で室町の文化を調べていく活動だった。室町文化と現在行われている岩村田祇園祭がつながっていて、そのことが2015年7月18日付の信濃毎日新聞の記事から読み取ることができることがわかったからだ。児童が神輿を担ぐなどして参加している祭りが実は室町時代を起源としていた事実から、児童たちの心を揺さぶることができる考えた。

ところが授業をしてみると児童の反応は意外に薄く、「えー！俺たちの祭りが室町時代とつながっていたんだ」というような期待していた反応に多くの児童はならなかった。この実践授業を通していくつかの課題が見えてきた。1つ目は室町時代の文化・くらし全般をねらいとしていて、その中の1つとして祇園祭を扱ったこと、つまり、児童の意識や疑問から出発したものではなく、突然「祇園祭」になった感が強いこと。2つ目は普段新聞を読む児童が多いという実態があるにしても、新聞がどのようにできているか、記事を書いた人が読者に伝えたいことは何か、それがどのように書かれているかといったことが実は読み取れていないのではないかとということ。大きくはこの2点であった。

そこでまず今回の公開授業では、新聞がどのようにできているのかを学んだ上で、実際に自分の見たこと聞いたこと感じたことの中から自分の伝えたいことが読み手に伝わるように書く活動を通して、これから様々な場面で新聞を活用することができるようになっていくのではないかと考え、実践のねらいとした。

III 研究の概要

新聞がどのようにできているかを知り、その上にたつて、修学旅行の場で取材を行い記事にして修学旅行新聞をつくり相手に伝えたいと願った子どもたちに、以下のような手立てを講ずると効果的ではないかと考えた。

- 1 新聞がどのようにできているかを学ぶ場を設定する(前単元)
 - ①信濃毎日新聞社の植田さんに出前授業をお願いし、子どもたちに教えていただく機会を持つ。
 - ②子どもたちの目に触れるところに新聞を置き、新聞を読む場と時間を作る。
- 2 新聞を作って他の人に伝えたいという願いがふくらむようにする。(前単元・本単元)
 - ①日頃の子どものたのびやきや日記などから拾い出し、それを全体に位置づける。
(例) 4年生：「見学してきたことを新聞にしたい」という日記の一文から活動が展開された。
 - ②「作った新聞を誰に読んでもらうのか」というように、どのように活用できるか考える場を持つようにする。
- 3 修学旅行に向けて、取材の仕方について学ぶ場を設ける(前単元)
 - ①旅行新聞の記事にする見学場所を1カ所に決める。各自でどの場所をテーマにするのかを十分考えて決めることができるように時間を設ける。
 - ②資料の提示や新聞・書籍・インターネット等で十分に事前学習を行い、興味を持ったことや疑問に思ったことを明確にして目的を持って旅行に臨めるようにする。
 - ③取材では自分がその場で見たこと・耳で聞いたこと・触れて感じたこと・その場所に行かなければ味わえない感動や驚きなどをメモする。
- 4 取材してきたことをどのように記事にするかを学ぶ場を設定する(本単元)
 - ①見出しの役割を確認して考える時間を十分に確保するとともに、アイデア交換の場を設定し、友達からのアドバイスを受けられるようにする。またそのときのグループ構成には十分配慮する。
 - ②事実と感想を分けて考えることや、限られた字数で思いをどう書くかという意識を常に持って書けるようにする。

1 単元名 「修学旅行新聞を作ろう！」（6年 総合的な学習の時間）

2 単元設定の理由

本学級は元気な児童が多く、何事に対しても興味を示している。長野県立歴史館への社会科見学では、学芸員の方の話を熱心に聞いていた。ナウマンゾウの名前が発見者のナウマンが由来ということに、多くの児童が「おお」と感嘆の声を上げるほど、学習に前向きに取り組んでいた。しかし、社会科見学のまとめの活動として行った新聞づくりでは、聞いてきたことをそのまま文章にし、パンフレットの内容を写すだけで自分が一番伝えたいはずのことが伝えきれていない児童がいた。また、新聞のレイアウトが上手いかず、スペースが残ったり足りなくなったりした児童も見られた。見出しについても、読者に関心を持ってもらおうと工夫をしていた児童もいたが、「博物館の裏側に潜入！」のように、一見良さそうでもどんなことが書かれているのか本文を読まないといけないものもあった。このように、せっかくの学びが表現しきれない活動になってしまった。

このことは、誰に何を伝えるための記事を書き上げていくのか見通しを持てていなかったと考えられる。また、どんなことに注意して書いたり取材したりすれば良いのかわからないまま学習に取り組んでいたことも一因である。そこで、より伝わるオリジナルの文章が書けるようになることを願い、信濃毎日新聞社の出前講座の受講を企画した。その中で、記事のレイアウトやキーワードを活用した本文の書き方、見出しのつけ方について学習した。出前講座を通して子どもたちは、自分にしか書けない新聞を作るためには、事前に調べた情報だけでなく、感じたことや考えたことを記事に書くことが大切であることを学んだ。

修学旅行は子どもたちにとって、とても楽しみにしていた活動である。そのため、事前に見学場所について調べ見学場所への思いを高めていた。そして、当日は関心を持って熱心にメモを取りながら取材する姿が多く見られた。自分が初めて見聞きした感動を伴う活動だからこ他の人にも伝えたい気持ち強い。これまでに新聞作りで学んだ方法を活用すれば、読み手に思いが伝わる新聞を作れると考える。

そこで修学旅行新聞作りの活動を通して、パンフレットや話をそのまま写すのではなく、感じたことや思ったこと、考えたことが伝わるような記事を書いたり、伝えたいことが凝縮している見出しを作ったりしてほしい。そして、自分が書いた新聞が相手に伝わった喜びや満足感を実感してほしいと願い本単元を設定した。

3 単元の目標

- （1）読者に伝わる新聞を作るため、意欲的に活動に取り組む子ども
- （2）課題を解決するために活動の見通しをもって活動する子ども
- （3）新聞づくりに必要な情報を自分で見極めて活用する子ども
- （4）友だちの意見を聞き、より伝わる新聞を書こうと努力する子ども

4 単元展開の概要（全9時間）

本単元の前に、出前講座を受講した。新聞の書き方だけでなく、見学場所の取材方法なども学んだ。インターネットを使って見学場所を調べ、自分が興味関心を抱いた場所について取材できるように準備をして、修学旅行に臨んだ。

探究過程	○主な学習活動 ※ポイントとなる子どもの意識	支援 (評価)	時数
課題設定	○修学旅行での学びを、どんな新聞にするのか考えよう。 ※自分たちが勉強してきたことを伝えたい。 ※驚いたことや感動したことをみんなに伝えたい。 ※発表になると、参観日だけになっちゃって、見てもらえる人や時間も限られちゃう。新聞ならいつでも見られるし、自分の伝えたい場所も決められるね。 ※オリジナルの新聞を作るためには、書いてあることだけじゃなくて、感想も書くって一人ひとり変わるね。	・修学旅行のまとめ方として前回の見学のとき作った歴史新聞で上手いかなかったことを想起する場を設ける。	1
整理・分析	○取材した情報を整理し、伝えたいことを3つ決めよう。 ※間違った情報がないか見学場所が同じ友だちと確認したいな。 ※今回の見学場所で一番学べたことや驚いたことをメインにして書いていこう。 ※自分が思ったことも伝えていこう。	・出前講座で学んだことを思い出す資料を提示する。 ・整理することが苦手な児童には、どんなことに驚いたのか、何が勉強になったのか等、助言していく。	2
発表	○前時に考えた3つの記事を伝えたい順番に並べよう。 ※出前講座で教えてもらったレイアウトの仕方や文章の書き方を参考にしながら考えていこう。 ○本文を完成させ、ワークシートに立ち返り、一番伝えたいことを確認しながら見出しを考えていこう。 ※出前講座で見出しが大切だと言っていたよ。 ※見出しはしっかり考えなくちゃ。 ※記事を読まなくても内容が伝わるように、短い文章で見出しを作ってみよう。 ※この見出しで相手に伝わるのかどうかわからないから、いくつか候補を出しておきたいな。 ○候補に挙げた見出しを見合い、理由を添えてどれが良いのか考えていこう。(本時) ※本文には、ステンドグラスの天井のことや、唐草模様のきれいさが中心に書かれているから、「美しい唐草模様の下で作られる法律」のほうが良いと思うよ。 ※本文に、体のつくりについて書いてあるから、「卵ではなく子を産むフタバスズキリュウ」の方が、良いと思うな。 ※文章の間違いがないか、しっかり読み直さないね。 ※お家の人や校長先生、5年生に読んでもらいたいな。	・取材した内容を整理して、どの話題をトップ記事にするかを決める時間を設ける。 ・レイアウトシートを参考に新聞を作る場を設ける。 ・本文の内容がきちんと相手に伝わるものになっているのか確かめながら書くように促す。 ・見出しの候補を考え、次時でみんなに相談し合うことを伝える。 ・前時で作った見出しの候補を、班の友だちに紹介しながら、どの見出しが良いのか伝え合う場を設ける。 ・一番伝えたいことは何かを友だちに伝えて考えてもらうように促す。	1 3 1
まとめ	○トップ記事以外の見出しを決めて新聞を完成させよう。 ※トップ記事と同じように伝わる見出しにしたいな。 ※伝わったかどうか感想を聞きたいな。	・相手に伝わる新聞になったのか振り返る時間を設ける。	1

5 本時案

(1) 本時の主眼

修学旅行新聞の本文を書き上げ、見出しの候補を考えた子どもたちが、トップ記事の見出しをつける場面で、ワークシートを使い一番何を伝えたいのか立ち返り、友だちに見出しの候補を紹介したり、友だちからの意見を聞いたりすることを通して、アドバイスをもとにトップ記事の見出しを決める事ができる。

(2) 本時の位置（全9時間中第8時）

前時：本文を書き、それに見合った見出しを考え、学習プリントに紹介できるように書いた。

次時：トップ記事以外の記事に見出しをつけて新聞を完成させる。

(3) 指導上の留意点

- ・アドバイスの際は理由を示し、友だちの考えを否定するのではなく、代替案を出すように促す。
- ・意見が出し合いやすいように座席は4人ずつとする。
- ・班の友だちの新聞を印刷し、班の友だちがどのようなことを書いているのかわかるようにする。

(4) 本時の展開

段階	学習活動	予想される児童の反応	指導・援助と評価	時間
導入	学習問題：フット学級修学旅行タイムズ 2018 を作ろう！			
	1 本時のめあてを確認する。	・今日は見出しを決めよう。 ・見出しはその記事で一番読者に伝えたいことを表しているんだよね。 ・私の見出しはちゃんと本文を表しているのかな？	・新聞完成までの予定が書かれた模造紙を提示し、本時の活動を確認する。 ・前時の相談しあう姿を想起し、本時の迫及方法を問う。	5
	2 一番伝えたいことが見出しになるようにするためには、どのようにすれば良いか考える。	・本文が見出しの説明をしているから、見出しと本文がつながっているのか確認してみれば良さそう。 ・ワークシートの▽の部分の言葉が使われていると良いんだよね。 ・10～20文字ぐらいでまとめてあると良いんだよね。 ・新聞を読んでもくれる人が何について書いてあるのかすぐわかるようにしないとイケないね。 ・2つ見出しは考えたけれど、どちらの方が良いのかわからないな。 ・今日は、友だちからアドバイスをもらいながら、見出しを決めていきたいな。	・本文は見出しを説明していることを確認しておく。 ・保護者や校長先生、5年生に向けて作ることを再確認する。 ・どうすれば確認できるのか問う。 ・10～20文字で本文の事柄を表すキーワードを用いて作ると良いことを出前講座のポイントを書いた模造紙をもとに確認する。	5
	学習課題：自分が考えた見出しを紹介して、友だちのアドバイスを参考に見出しを決めよう。			

4 班の活動から

N児：(班の友だちからA案が良いという付箋とB案が良いという付箋が貼られたワークシートを見ながら) 先生、俺はよくわからない！

T：どうしたの？

N児：班の友だち2人はA案が良いって言っているんだけど、1人はA案に関係した記事が書かれていないからB案の方が良いって言うんだよ。どうしたらいいんだろう。

(中略)

班の友だち：もう一度、N児の記事読んでみようか。

班の友だち：やっぱりティラノサウルスが強いということは書いてないね。やっぱりB案なのかな？

(このまま班での活動が終わってしまったため、見出しを決めることができなかった。)

【考察】

N児は、ティラノサウルスについての見出しを決める際、ティラノサウルスは強いというイメージでつけた見出しが、記事には書かれていないという指摘を受けた。自分ではA案が良く、しかもみんなに選んでもらったが、記事と違うことは載せられないと悩んでいた。

以前のN児であれば、「ま〜良いでしょ」と見出しを決めてしまうこともあったが、自分の思いがたった新聞だけに、みんなに伝わる見出しを書きたいという思いがあったのではないだろうか。

(2) 授業後のご指導から

○新聞を書くことを通して新聞について知ることが新聞を活用していく力となっていくという研究の方向は明快で、授業もそれにつながっている。

○読むために作ることから始めるという方向は良く、きちんと読める子が増えていくだろうと思われる。こういう力がついていけば生きてくる。今回のような授業は力をつけていくことにつながっていくと考えられる。

▲見出しから本文に戻れると良い。実際に新聞記事を書く現場でも同じように本文に立ち返ることがある。

▲伝えたい相手を明確にする必要がある。家の人、校長先生、5年生と三者は立場が違う。見学場所を知っている状況が違う。全く知らない相手なのか、そうでないのか。誰の立場で考えるのかを明確にすると、アドバイスも変わってくる。

(3) 今後の展望

今回の実践授業を通して、読みの活動と書きの活動を行った。新聞が読めるようになるには、まずは新聞作りからということで活動していった。1学期の実践授業では、見出しや記事からの読み込みに慣れておらず、ただ読んで感想を言うことが多かった子どもたちだったが、今回の活動を通して、記事の重要なキーワードの読み取りや文章構成の仕方など、新聞の仕組みを学んだことで、以前よりも記事に書かれた文章から理由を話したり、何度も読んで考えを伝えようとしたりする姿が見られるようになった。また、毎朝担任が新聞で気になるニュースを取り上げていったことで、子どもたちが社会の出来事や事件などに興味を持つようになってきた。しかし、新聞作成においては、新聞のもつ「誰にでも」という視点が足りなかったように思う。新聞の持つ公平性など新聞の核となる部分について子どもたちが触れることができているならば、書くための視野も広がったと考える。

今後は、新聞作りの活動を活かして授業の中で新聞を読む活動を多く取り入れ、より授業と世の中が近くなる実感が持てるような学習を仕組んでいきたい。